

北の古代防御性集落とその時代

——「山城型の防御性集落」に関する一試論——

齊 藤 利 男

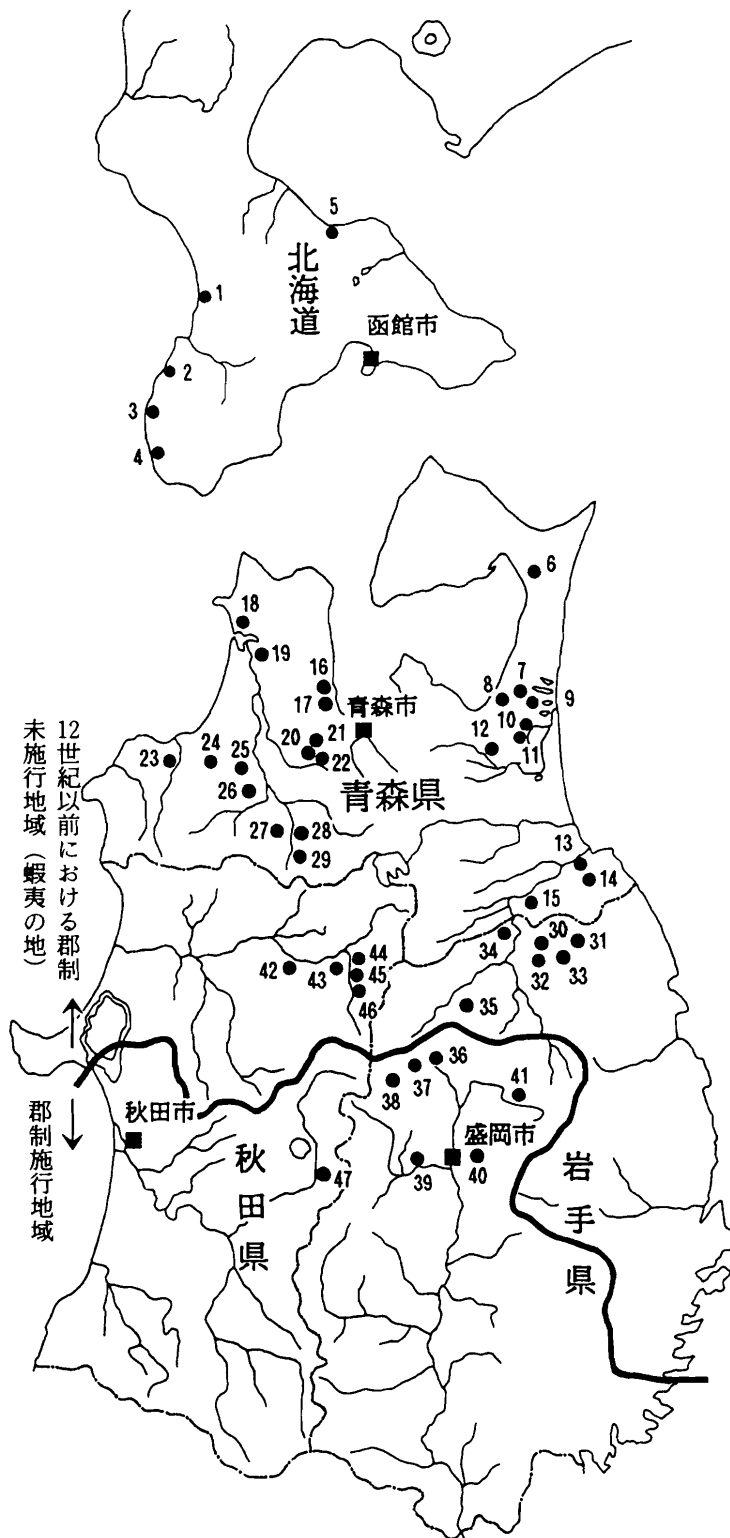
一、「北の古代防御性集落」への注目と本格的論議の開始

いま「北の古代防御性集落」が注目されている。そのきっかけは一九四一～五年に行われた青森県浪岡町高屋敷館遺跡の発掘調査¹⁾で、平安時代後期の集落跡を取り囲む幅四～七m・深さ三～四mの大規模な空壕と壕の外側をめぐる高さ一m（当時の高さは一・五mと推定）の土塁跡が明瞭な形で出土した結果、マスコミにも大きくとりあげられ、全国的な関心を集めるに至った。これと時期を同じくして一九九五年四月には『考古学ジャーナル』が「北日本の平安時代環濠集落・高地性集落」の特集を組み、九六年十月には弘前市で考古・文献史学双方の研究者を交えた初めての本格的シンポジウム「弘前シンポジウム96 日本史のなかの北の『防御性』集落」が開催された。

「北の古代防御性集落」とは、十世紀半ば～十一世紀後半（ないし十二世紀初め）、ほぼ北緯四〇度ライン以北の本州北部と北海道、すなわち当時の「蝦夷（エミシ・エゾ）の地」に出現する、周囲を環壕・土塁などの防御施設で囲んだり防御に適した高い山の上に営んだりした集落（環壕集落・高地性集落）のことである。十世紀半ばとは、古代日本国

家が律令体制から王朝国家体制に転換し、朝貢と饗給にもとづく従来の蝦夷支配方式が変化。鎮守府・秋田城が蝦夷支配の機関として強化されるとともに、その有力在庁たる「俘囚長」安倍・清原氏が登場する時期に当たる。しかも文献史料の上では蝦夷の蜂起が姿を消し、北奥羽の地に「平和」が訪れたと評価されている時期でもある。だがまさにその時代、文献の示すところとは反対に、軍事的な緊張・戦争状態の到来を物語るあたかも弥生時代の環濠集落・高地性集落を思わせる集落が「蝦夷の地」に出現するのはなぜか。ちなみに、その遺跡数は現在確認されているものだけでも五〇近く（図1）。これまで中世後期～近世のものとされていた北海道のチャシのなかにも同じ性格のものが多数含まれているとみられ、類似の遺跡は当時オホーツク文化圏にあったサハリン島南部でも発見されている。単に「安倍・清原の平和」の内実が問われるだけでなく、日本列島北部を含めた東北アジア史全体の見直しにも通ずる大きな問題である。

もっとも、この「北の古代防御性集落」遺跡が注目されたのは新しいことではない。東北地方北部に、「タテ（館）」「蝦夷館」などと呼ばれ、台地を空壕で区切り内部に竪穴住居跡を伴った集落や砦の跡が広く分布



北海道道南地方

- 1 小茂内遺跡
- 2 ワシリチャシ遺跡
- 3 原口遺跡
- 4 札前遺跡
- 5 尾白内遺跡

青森県

- 6 将木館
- 7 戸鎖館
- 8 明前館
- 9 鷹架沼堅穴遺跡
- 10 内沼蝦夷館
- 11 中志蝦夷館
- 12 内蛇沢蝦夷館
- 13 熊野堂遺跡
- 14 風張(1)遺跡
- 15 南部町蝦夷館
- 16 蓬田大館遺跡
- 17 蓬田小館
- 18 墳(古)館
- 19 中里城遺跡
- 20 高屋敷館遺跡
- 21 野尻(4)遺跡
- 22 高館遺跡
- 23 種里城遺跡
- 24 大館森山館
- 25 小友館
- 26 中別所館遺跡
- 27 石川長者森遺跡
- 28 砂沢平遺跡
- 29 碓ヶ関古館遺跡

岩手県

- 30 大日向II遺跡
- 31 牛転ばし館遺跡
- 32 たてひら館遺跡
- 33 民田山館森遺跡
- 34 駒焼場遺跡
- 35 コアスカ館跡
- 36 暮坪遺跡
- 37 子飼沢山遺跡
- 38 三ッ森山遺跡
- 39 千ヶ窪I・II遺跡
- 40 竹林遺跡
- 41 太布蝦夷森遺跡

秋田県

- 42 横沢遺跡
- 43 太田谷地館跡
- 44 妻の神I遺跡
- 45 下沢田遺跡
- 46 北の林I遺跡
- 47 古館遺跡

図1 東北北部・道南地方の防御性集落
(三浦圭介氏作成の原図を修正・加筆)

していることは、戦前から歴史・考古学者によく知られた事実であった。そして、古代蝦夷Ⅱアイヌ説の影響から、これを「チャシ」と呼んで、「東北の先住民アイヌの砦」としたり、東北アジアやシベリアのオストローク・ゴロディシチエと同性格の「集落堡砦」と評価する傾向が、一九六〇年代までは支配的だった。その後中世城郭史研究の立場から、タテ(館)ⅡチャシⅡアイヌの砦説は否定されたが、東北北部の「館」のなかに北海道のチャシと類似するもののあること、「領主・土豪の城館」では理解し得ない「集落堡塞型砦」としてみるべきものが数多く存在することは間違いない事実であり、その評価は依然として問題であった。⁽⁸⁾

近年の開発行為にともなう考古学的な発掘調査の進展は、これら遺跡の時期が平安時代後期の十―十一世紀に遡り、その実態も、支配者の居所たる「城館」でなく、族长を中心にムラの成員が集住する集落遺跡であることを、次々と明らかにすることになった。いわば「集落堡塞型砦」説が再び脚光を浴びたわけであり、高屋敷館遺跡が注目を集める以前から、考古学では三浦圭介・工藤雅樹・高橋学氏ら、文献史学の立場からは遠藤巖氏らによって、古代防衛性集落の問題を正面にすえて日本の北方史を考える研究が積み重ねられていたのである。先に紹介した『考古学ジャーナル』の「北日本の平安時代環壕集落・高地性集落」特集も、新たな研究状況をふまえたその集大成であった。

だが、当然のことながら、「北の古代防衛性集落」が研究テーマとして市民権を得たことは、従来必ずしも厳密に論議されてこなかった種々の問題をあらわにすることになった。例えば、集落遺構が十―十一世紀

のものであっても、現存する防衛遺構がそれと同じ時期のものなのか、という疑問は当然湧いてくる(中世の遺物こそ出土しないが、外見は中世城館そっくりの遺跡もある)。集落を構成する人口規模はどの位で、果たして「集落」といえるものなのか、という問題もある。同じ「集落堡塞型砦」であっても、戦国時代の「村の城」の類型で理解すべきものもあろう。こうした問題が全ての遺跡で検証されているわけではないことは事実であつて、最近、工藤清泰氏は「遺物・遺構の解釈が厳密な考古学的手順抜きに議論されている状況がある」として、新たな問題提起を行った。⁽¹⁾

工藤氏の論点は多方面にわたるが、遺跡自体に関していえば次の三点に整理できよう。①年代決定の基準となる十―十一世紀という土器編年に問題はないか。十二世紀前半まで下るのではないか。②集落を区画する空壕・大溝を「防衛施設」と考えてよいか。初期の環壕は規模が小さく、むしろ宗教的な「境界」とみるべきで、のちの大規模な環壕もその発展形態と考えたい。③環壕内部にあった住居はせいぜい十数軒程度で、それほど多くない。環壕の外部に集落があつたのではないか。そして、環壕内に居住する者が外部の集落に住む人々を率いて地域の開発を主導した。つまり「防衛性集落」というより、中世の「館」につながるものとして評価すべきである。

もとより、工藤氏の見解の当否については意見が分かれるであろう。しかし、厳密な考古学的手順に基づいた遺物・遺構の分析が必要だ”という氏の主張自体は正当であり、今後の研究の発展のためには、氏の指摘に答えうるような遺物・遺構の分析と、古代後期―中世初期の本州北

部・北海道地域の社会・文化の全体像の解明が、求められることはもちろんである。そして、そのためにも、個々の「北の古代防衛性集落」の事例の集積と分析の積み重ねが、基礎作業として必要になってくる。

先に私は、「北の古代防衛性集落」出現の問題を軸に十～十二世紀の北方蝦夷世界の歴史を概観し、十世紀代における古代国家の蝦夷政策の転換とエミシ社会の変容、「エゾ」世界の成立、本州北部社会の「北の文化圏」への回帰、「防衛性集落」の出現と「戦争の時代の到来」について述べた。⁽¹⁵⁾そして「戦争の時代」をもたらしたものとして、エゾ社会内部における富の蓄積と内部抗争、北の「エゾ」勢力と南の「日本国」勢力との対立状況を指摘した。その際には、紙数の関係もあって、高屋敷館遺跡以外の遺跡について詳しくふれることができなかったが、本稿では、拙稿で「交通の要衝の地に成立した大規模で堅固な防衛施設を備えた集落」と評価した遺跡のうち、中世の奥大道沿い、津軽の平川河谷一帯に分布する、「中世の山城を思わせる防衛性集落」を取り上げ、具体的に論じたいと思う。一つには、それが現在三浦圭介氏の提唱する「津軽型」「上北型」の形態分類に収まりきらない類型の提示になると思うし、第二に、「宗教的結界」説を主張する工藤氏に対し、異なった視点からの問題提起になると考えるからである。

二、平川河谷における「山城型の防衛性集落」

岩木川の上流に位置する青森県南津軽地方の平川河谷（南津軽郡大鰐町・碓ヶ関村）は、津軽から陸路を経由して比内・鹿角・糠部・北上盆

地に至る回廊地帯にあたり、中世には奥大道のルートともなった南北交通の要地である。それゆえ、南北朝動乱に際しては南北両党の軍勢が、また戦国時代にも南部・安東・浅利・大浦などの兵が、くりかえし行き来し、その度に異なる勢力の占領を受けた場所であった。かかる回廊地帯としての地理的・政治的条件は、当然、古代においても同じだったに違いない。例えば、一〇七〇年（延久二）に清原真衡の主導で行われた「津軽の夷追討」⁽¹⁷⁾ 延久二年合戦では、南の「日本国」側から津軽に侵攻する軍勢の通路となつたはずだし、それに先立つ前九年合戦（一〇五一～六二）でも、厳しい政治的緊張のもとに置かれたことであろう。

こうした立地のゆえであろうか、平川河谷には大鰐町砂沢平遺跡・碓ヶ関村古館遺跡など、同じ津軽地方であっても、高屋敷館遺跡など津軽平野部の集落とは明確に異なつたタイプの防衛性集落遺跡が分布している。現在地表面から観察されるその姿はあたかも中世の山城を思わせるもので、もしそれが古代以来のものであれば「山城型の防衛性集落」とでも類型化できようか。両遺跡とも東北自動車道の建設工事によって一部が破壊されてしまつたが、幸いかなりの部分が残存しており、現地踏査と発掘調査（工事に際して行われた緊急調査）報告書に残されたデータをもとに検討を加えれば全体の復元は可能である。

（一）砂沢平遺跡・碓ヶ関村古館遺跡の立地と特徴

砂沢平遺跡は大鰐町大字長峰字砂沢平、国道七号線の通っている麓の長峰集落から五〇mほど高地に登つた海拔一五〇mの東西に細長い丘陵上にある。この丘陵は地質学的には平川の中位河岸段丘面にあたり、上

部は平坦で、その平坦面を利用して集落が営まれた。しかも丘陵南側は比高差約五〇mの急斜面、北側も一〇～二〇mの急斜面で、集落の立地自体が天然の要害であった。とくに南側は見晴らしがよく、遺跡に立つと平川河谷の水田地帯や唐牛・古懸など近隣の集落、南方二kmの碓ヶ関村古館遺跡まで一望に見渡せる。実はこの「高地性集落」ともいふべき立地こそ砂沢平遺跡の最大の特徴で、高屋敷館遺跡とは全く違ったところである。集落周辺にはまとまった耕地を造る場所はなく、古代砂沢平集落の住人は、丘陵を下り、平川沿いに広がっていたであろう水田・畠地まで耕作に行き来したであろうが、それは非常に不便だったに違いない。こうした集落の立地から見ても、砂沢平遺跡が生活や開発の利便よりも防御、それも主として南への防御を意識して選地されたことは明白である。砂沢平という字名が示すように、中世に城館であったという伝承が残されていないことにも注目される。

同様の特徴は二km南の碓ヶ関村古館遺跡（碓ヶ関村大字古懸字沢田館岸、こちらは館の地名が残る。ただし、「碓ヶ関古館」といわれたのは現在の永野館跡の場所であり、この遺跡名は適切でない。古懸沢田館岸遺跡とも称すべきであろう）についてもいえる。遺跡が立地しているのは海拔一五六m、比高差三〇mの丘陵で、やはり平川の中段丘面に位置する台地の上である。とくに古館遺跡の場合、すぐ近くに現在古懸・不動野集落の乗っているほぼ同じ高さの広い台地がありながら（そこでは現在、台地上に水田・畑・果樹園が営まれている）、そこを避け、東の三ツ森山・白手山から続く山地の先端にあたる狭小な場所を選んで集落を構えていた。当然、ここでも集落のある台地上にはま

とまった耕地を造る場所はなく（遺跡の東一五〇mから白手山に続く尾根が始まる）、砂沢平遺跡の場合と同じく、比高三〇mの急斜面を往復して下の水田まで耕作に通わねばならなかった。（以上、[図2](#)・[図3](#)を参照のこと）

こうした「防御」を意識した集落の立地は交通路との関係からも指摘できる。平川河谷における近世羽州街道・近代国道七号線のルートは、碓ヶ関集落南端にある碓ヶ関所跡の手前で平川を渡った後、平川西岸を北上し、砂沢平遺跡の西で再び平川を渡河。今度はその北岸を通過して津軽平野南端の石川に達する。古代・中世のルートがどうだったか不明だが、右の近世・近代のルートが平川本流と両岸の段丘崖を越える点で最も障害の少ないコースであることを考えれば、これと大差ないコースだったに違いない。注目されるのは、古館遺跡がこの街道筋から外れ、しかも古懸台地に遮られて南からは見通せない奥まった地点にあることだ。また砂沢平遺跡の場合も、街道筋からはよく見渡せるものの、その方角（南側）は平川と比高差五〇mの急斜面によって遮られ、集落へ行くには一旦平川を渡り、西側を大きく迂回して丘陵を登らねばならなかった。地形といい、立地といい、いずれも「防御性集落」というのにふさわしい場所にある。

だが、それだけではない。二つの遺跡を子細に観察すれば、古代の集落を営むに際して自然の丘陵を整地・削平し、人工的に手を加えたことが歴然としており、集落が軍事的緊張下にあったことを示す武器・武具類も大量に出土しているのである。

[図4](#)は現地踏査による知見に『発掘調査報告書』のデータを加えて作

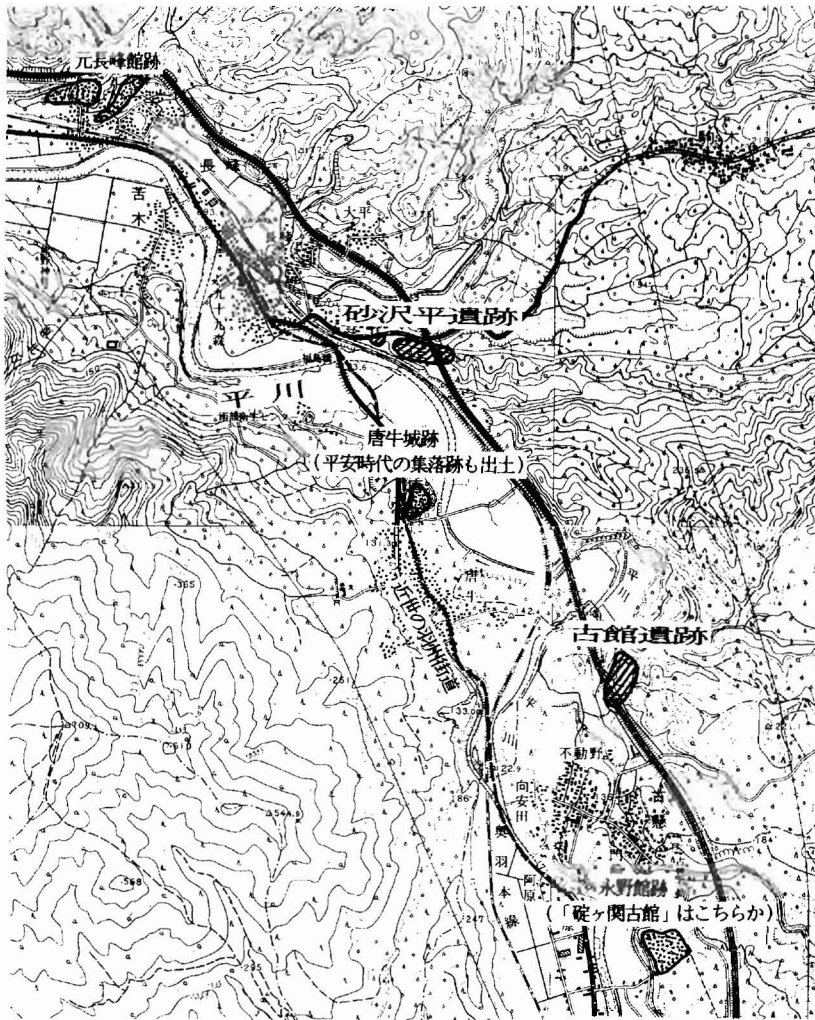
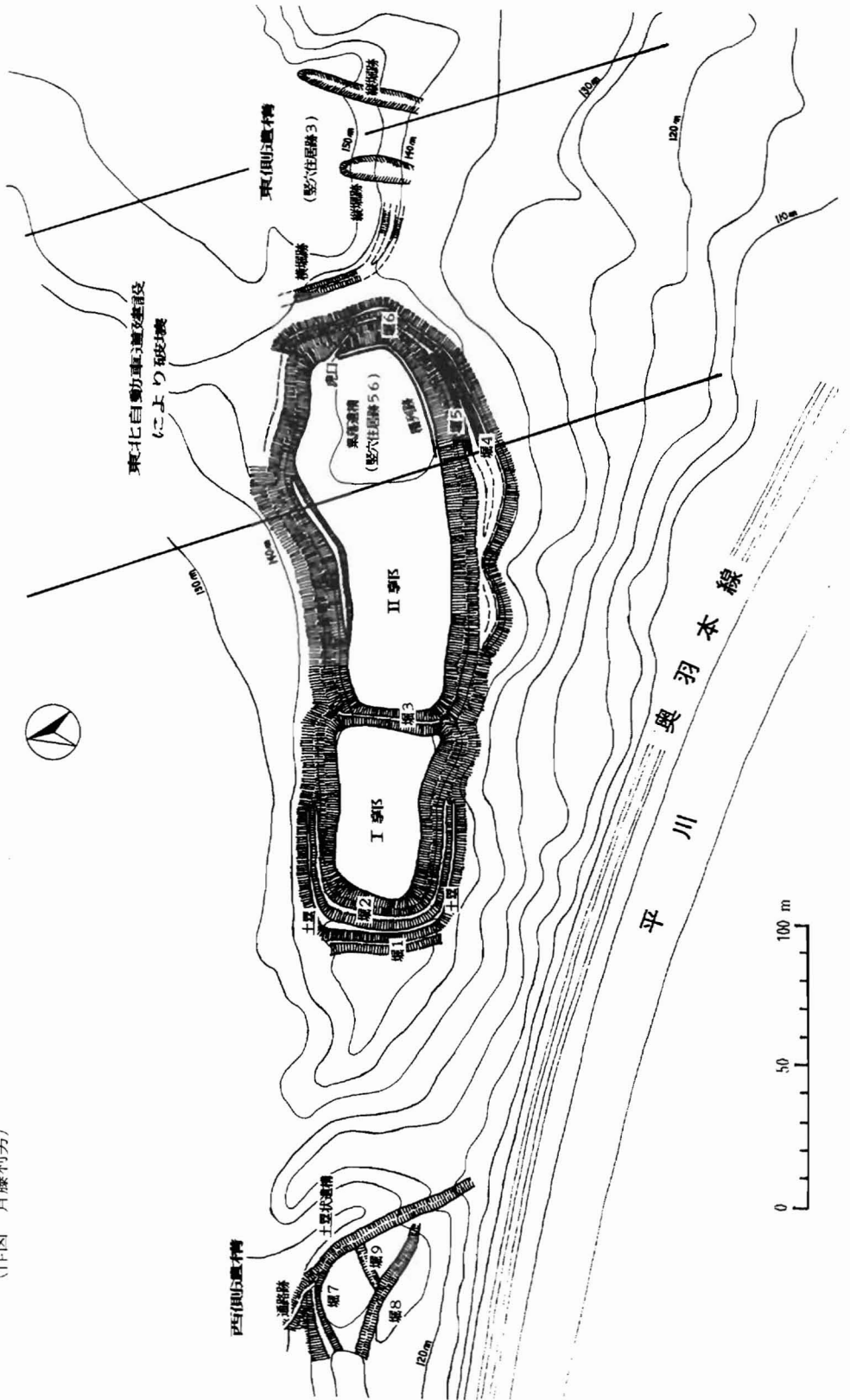


図2 砂沢平遺跡・古館遺跡の立地と周辺の中世城館
 (ベースマップは国土地理院二万五千分一地形図 大鰐・沖浦・阿闍羅山・碓ヶ関)



図3 南方向から見た砂沢平遺跡

図4 砂沢平遺跡見取図
 (作図 齊藤利男)



成した砂沢平遺跡の見取図である。一見してわかるように、東西に細長い丘陵を二本の空壕で分断して二つの郭を設け、さらに丘陵の中腹をめぐる横堀や、東西に隣接する丘陵には縦堀まで設けた、中世の複郭式の山城ともいってもおかしくない姿をしている。古館遺跡もまた、**図5**に示すごとく、台地の先端を空壕で掘切って二つの郭をつくり、中腹には横堀をめぐるした、やはり中世の複郭式城館そっくりの構造であった。ちなみに集落のあった郭(平場)部分の広さは、砂沢平遺跡ではI郭(西郭)が東西五五m・南北三〇m、II郭(東郭)は東西一三〇m・南北六〇m。古館遺跡もI郭(南郭)が東西五〇m・南北七五m、II郭(北郭)が東西八〇m・南北一三五m。いずれも高屋敷館遺跡より一回り大規模である。

両遺跡の発掘調査は、東北自動車道建設のための緊急調査として、一九七七～七九年に行われた(砂沢平遺跡はII郭の東半部と東側の丘陵が、古館遺跡ではI郭の部分が対象となった)。その結果、砂沢平遺跡では、縄文時代の遺物のほか、カマド跡をもつ平安時代の竪穴住居跡や(総数五九軒、うちII郭部分から五六軒検出。ただしカマドのみで住居跡かどうか不明のもの一棟、カマドを伴わず倉庫跡と思われるもの二棟、カマドがなくて方形張出し部をもつ十二世紀以降の竪穴倉庫建物に特有の形のもの二棟含まれる。大きさは一辺四～五mのものが多く、最大でも一辺七～八m。**図6**参照)、十一世紀の土師器(把手付土器など)・須恵器、木製椀、フイゴの羽口・鉄滓・鉄製品、古銭(中国銭2・寛永通宝5・不明1)などの遺物が出土して、平安時代(後期)の集落跡であると報告された。古館遺跡でも、同様に、少数の縄文・弥生

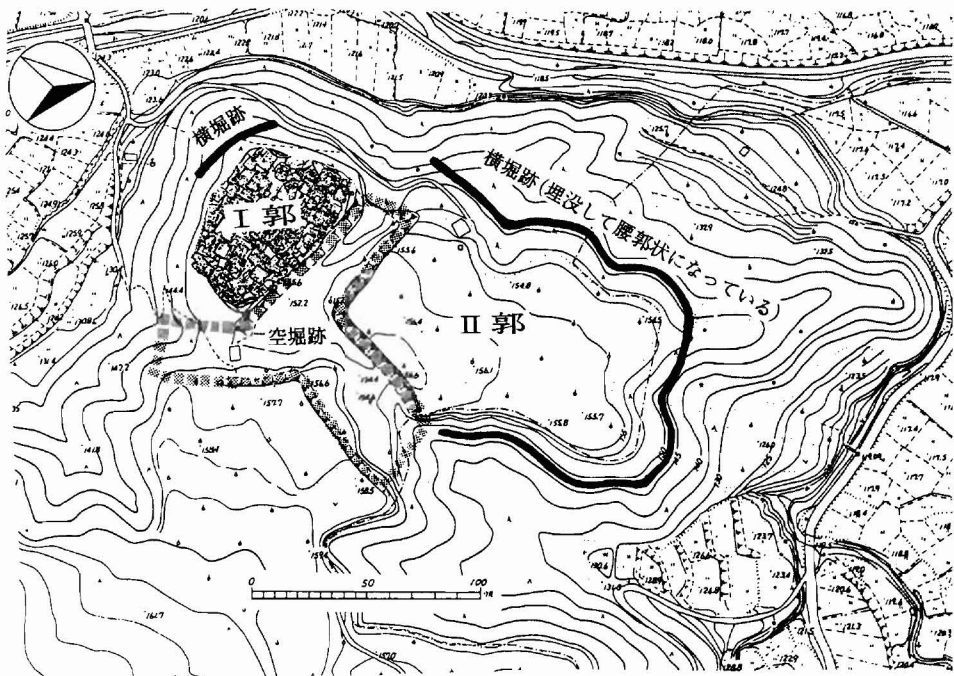


図5 碓ヶ関村古館遺跡見取図
(三浦圭介氏作成の原図を修正・加筆)

時代の遺物のほか、総数二五〇軒を超える掘立・竪穴・平地式の建物跡や（カマドを伴うものとなないものがある）、鍛冶・鉄製錬の工房跡と思われる焼土遺構が密集して検出、さらに、大量の平安時代後期の土師器（把手付土器、甕・壺形土師器など、全体の九〇％を占める）、またまった量の須恵器・擦文土器（破片数三四〇点）、フイゴの羽口・鉄滓、農具・馬具・武具などの鉄製品、砥石・硯・土錘、古銭、等々、量ともに豊富な遺物が出土し、多数の人口を抱えた十〜十一世紀の集落の存在が指摘されている。

興味深いのは、両遺跡とも、十〜十一世紀の日本列島北部（北緯四〇度以北の本州北部と北海道南部）に固有の土師器である把手付土器⁽²²⁾が数多く出土したこと、碓ヶ関村古館遺跡からは、本州内陸部で最多の三四〇点という多量の擦文土器が見つかったことである。それは、二つの遺跡の住人が、先に拙稿で述べた「北の文化圏」に属する人々であったことを物語る。さらに古館遺跡では、鉄製品の出土が三八三点と多量だった上に、鉄鏃（四〇本以上）・小札（二点、現存する日本最古の大鎧のものである可能性が強いと鑑定された）など、武器・武具類も多く、「集落としての性格は、農業に従事しつつ、盛んに鍛冶を行い、かつ武装も怠らない集落であった」と報告された⁽²⁴⁾。

ちなみに、一時期に存在した住居数は、古館遺跡では遺構の切り合いが激しく不明だが、砂沢平遺跡の場合、Ⅱ郭部分の総数五六軒から住居跡かどうか疑わしい五軒を除いた数が五一軒。想定される住居の変遷が六期として、一時期八軒ほど。発掘面積が全体の三分の一であるから、全体の数は単純計算で約二四軒となる。さらに一軒の居住者が五人とし

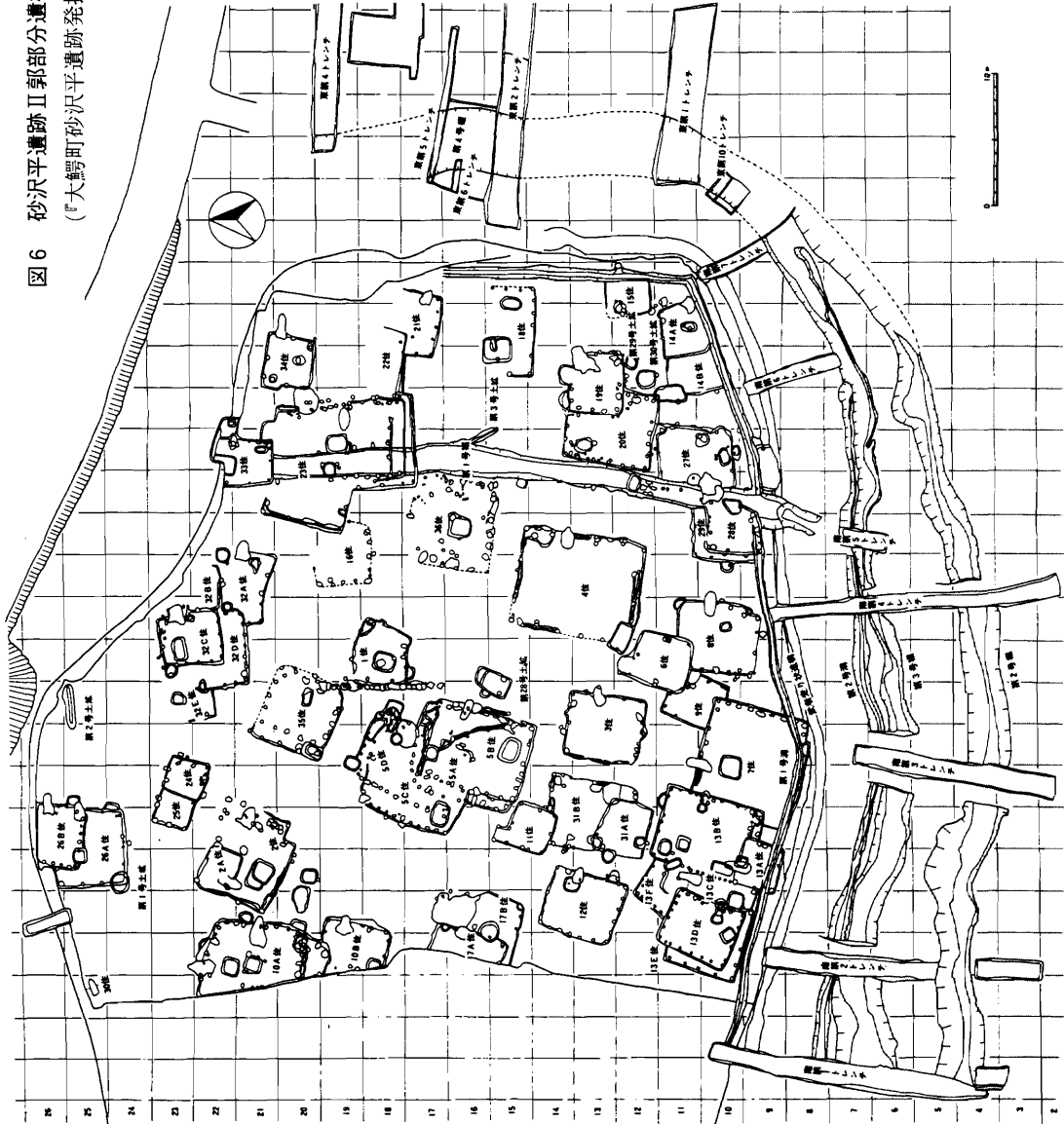
て一時期の人口一二〇人。もとよりこれは最大限に見積もった場合の概数であり、あくまで参考値にすぎないが、住居の大きさと配置に身分差・階級差による序列がうかがえないこととあわせ、「集落」という評価にふさわしいデータである。

一方、集落を取り囲む防御施設については、事前の観察で一部が確認されていたが、発掘の結果、砂沢平遺跡では、Ⅱ郭の縁辺部に設けられた溝Ⅱ柵列跡や、南・東斜面をめぐる横堀状の空壕（発掘前は埋没しており腰郭とみられていた）、武者走り状遺構、縦堀状の空壕が検出（図4・6）。古館遺跡でも、腰郭とみられていたⅠ郭西方の平場が、横堀の埋没した跡であったこと、Ⅰ・Ⅱ郭の間を分ける空壕が、幅広の空壕のⅠ郭寄りにさらに葉研状の空壕を掘り込んで造られていたことが判明した。また、いずれの場合も、郭を取り囲む斜面は要所要所が切岸状に加工され、切岸や空壕が古代集落の住居跡の一部を（古館ではかなり大規模に）破壊して造られていることも確かめられた。

しかしながら、とりわけ注目されたのは、両遺跡とも外見は中世城館に酷似しながら、発掘調査で出土した明確な中世の遺物は古銭のみで（砂沢平から2枚、古館から3枚。いずれも1枚は元豊通宝、北宋銭、初鑄一〇七八年）、とくに中世陶磁器が全く出土しなかったことである。もとより、これまで中世の遺跡を発掘して中世陶磁器が見つからない事例もあるから、それだけで両遺跡が中世に使用されていたことを否定する根拠にはならないが、それにしても、質・量ともに豊富な古代の遺物に対し、中世の遺物が全くといってよいほど出土しなかったことは無視できないのであって、軍団による一時的な陣所や砦、近隣の住人の避難

図 6 砂沢平遺跡Ⅱ部分遺構配置図

(『大鯉町砂沢平遺跡発掘調査報告書』より)



所（いわゆる「村の城」）など、非日常的な施設として使われたことはあつたとしても、領主や民衆の恒常的な生活空間であつた可能性はきわめて少ないのではあるまいか。しかも両遺跡とも、縄文のムラが営まれていた丘陵面を削平・整地して古代の集落が造られており、縄文時代の住居跡はほとんど消滅し遺物包含層すら存在していなかつた。それはまた、平安時代後期、砂沢平・古館の丘陵上に集落が建設された際、自然地形を大きく改変する工事が行われたことを物語るものである。

（二）砂沢平遺跡の「城郭遺構」はいつ造られたか

問題は、集落と空壕・柵列・切岸など「城郭遺構」の同時性、つまり古代集落が営まれていた平安時代後期に、どのような人工的な防御施設が設けられていたかである。碇ヶ関村古館遺跡の場合、①住居跡が空壕によって大きく破壊されていること、②幅広の空壕の中にさらに薬研堀を掘って防衛力を強化するという堀の構造が、後述のごとく戦国時代の南部・津軽地方の城館の特徴をもっていること、③小字名「館岸」が示すように城館跡の伝承が伝えられていること、等から、戦国期に城郭として改修・再利用されていた可能性が高いので、ひとまず保留し、砂沢平遺跡を対象に検討してみよう。

現在、表面観察によって確認される砂沢平遺跡の「城郭遺構」は、次のごとくである（以下の説明に付いては図4を参照されたい）。

まず、遺跡主体部（Ⅰ・Ⅱ郭）と谷を挟んで向い合う西側の丘には、二本の空堀（堀7・8）が東西方向に掘られ、とくに北側の堀（堀7）は西半部が広く、かつ深く造られているほか、東半部で南北に向きを変

え縦堀となつて南斜面に落ち込んでいる。この空堀と東側の谷の間は掘り残しの土塁状の地形で、谷からの侵入に対する障壁をなす。さらに堀7・8の間の小山には浅い空堀9が掘られ、付近は迷路状の地形になっている。まさに空堀を複雑に発達させた中世城郭のつくりである（以下これを「西側遺構」と呼ぶ）。この西側遺構と遺跡主体部（Ⅰ・Ⅱ郭）との関係が問題となるが、両者をわける谷は深く幅広であり、また、後述するように、Ⅰ郭の西に続く丘陵の部分はほとんど人工の手が入つておらず、西側遺構の複雑さと比べて異質であつて、西側遺構がⅠ・Ⅱ郭の西の防衛線だったならば当然あるはずの連絡施設等もみられない。一方、空堀7から西に続く谷状の部分は坂虎口状の出入口になつていて、堀7の底から北側の丘へ登る通路の跡もある。現在北の丘には宗教施設と温泉旅館が建っているため旧状は不明だが、この西側遺構は、本来、北の丘にあつた（と推測される）中世城郭の虎口部分ではなかつたろうか。堀7東側の土塁状遺構が、東の谷筋からの侵入を防ぐ造りであることも、西側遺構Ⅱ「Ⅰ・Ⅱ郭の西の防衛線」説を否定する根拠となる。もとより、遺跡主体部であるⅠ・Ⅱ郭は西側遺構と向い合つて立地するから、そのことは、中世に西側遺構の城郭が築造された際、Ⅰ・Ⅱ郭部分に何らかの手が加えられた可能性があることをも意味するが、当面、この西側遺構はⅠ・Ⅱ郭Ⅱ砂沢平の防御性集落と切り離して論じてよいと思う。

これに対し、砂沢平遺跡の主体部（Ⅰ・Ⅱ郭）Ⅱ古代集落が営まれた丘陵の中心部は、堀1・2と堀3の二本の空壕が掘られて、東西二つの郭に区画され、とくにⅠ郭の西は二重堀（堀1・2）となつて、西から

の攻撃に対する強固な防衛ラインを形成している。空壕の形は薬研堀な
いし箱薬研堀で、幅と深さは、現状で、堀1が5mと一・五m、堀2
(最も埋没が進んでいない)が十二・三m、三・四m、堀3が五・七m、
三m。ちなみに、堀1と2を合せた幅は約二〇mある。

しかも、I・II郭の防衛施設はそれだけにとどまらない。発掘調査の
結果、I郭南側の斜面に存在していた腰郭状の平場は、箱薬研状の二本
の空壕(堀4・5)が埋没した跡とわかり、この堀がII郭南東側で合体
し、幅四m・深さ五mの堅固な箱堀(堀6)となつてII郭の東側をま
わつていたことも判明した。これからみれば、現在I郭の南・北側斜面
にみられる腰郭状の平場も、同じくI郭西側の堀2から延びた横堀が埋
没した跡と推測されよう。とくにI・II郭の南斜面は、上部こそけわし
いが、下るにつれて緩斜面となつており、横堀はこの弱点をカバーする
ための工夫であつたと思われる。また、II郭の東側と南側の縁には柵列
が設けられ防衛を固めていたことも、調査の結果確かめられたし、II郭
の東側に向い合う丘からも、三棟の竪穴住居跡、二本の縦堀、丘をめぐ
る横堀の跡が検出され、I・II郭部分に付随した何らかの施設の存在を
うかがわせた。

こうした砂沢平遺跡主体部の姿は、まさしく横堀を周囲にめぐらした
「複郭式」の城館の造りである。もし、これらの城郭遺構が十・十一世
紀の古代集落遺構と同時期のものならば、高屋敷館遺跡などとは区別し
て、「山城型の防衛性集落」と定義するのが適切であろうし、構造上か
らみれば、西のI郭が主郭で族長の居住地、東の広いII郭は副郭で集落
一般成員の居住空間、と判断できようが、果たして平安時代後期の日本

列島北部に、こうした複数の郭や二重の堀をもつ壮大な「集落」が出現
していたのだろうか、当然、疑問が出されるに違いない。

しかしながら、砂沢平遺跡の「城郭遺構」には、子細に観察すると中
世に造られたものとするには多くの不自然な要素があつた。

例えば、I郭西側の丘陵先端部に二重堀を隔てて存在する小區画は、
一見小さな郭のように見えるが、実は自然地形そのままで、全く削平な
どの工事を受けた跡がない。しかも尾根状の地形で緩やかに北西方向に
下つており、この尾根を登つて敵が侵入することは比較的容易であつた。
当然、中世の城郭ならば、途中に掘切りなど遮断のための工夫を設けた
はずである。また、丘陵南側の斜面にも随所に傾斜の緩やかな場所があ
り、これまた中世城郭ならばいくつかの腰郭を設けて防衛を固めるとこ
ろだが、そうした工事の跡も見当らない。さらに、I・II郭の北側の斜
面がかなり自然地形に近く、切岸の工事も不十分であることも軽視でき
ない要素である。

さらに重要なのは、II郭の東側は一応切岸状の斜面だが、高さが四・
五mと低い上に、堀6をめぐる以外特別な工夫もなく(この部分は
現在は消滅しているが、『発掘調査報告書』所載の地図・写真より推定
した)、防衛上の大きな弱点となつていたことだ。そして、何よりも不
思議なのは、砂沢平遺跡がこれだけの本格的な城郭の造りでありながら、
「虎口」(出入口)の構えが実に貧弱であつたことである。『発掘調査報
告書』所載の地図と発掘現場写真を見ると、高速道路建設で破壊されて
しまったII郭の東側斜面を登つて台地上に上る道があつたことがわかり、
この道が郭への出入口II虎口だつたと思われるが、単純な登り道で、戦

国時代の城郭によく見られる「喰違い」「枘形」を備えたものではないか、かつたようなのである。

もとより、以上はあくまでも地表面からの踏査・観察の結果であり、最終的な結論は、将来の考古学的な発掘調査を待たねばならないが、私見では、砂沢平遺跡が戦国時代の城郭であった可能性はほとんどなく、南北朝・室町時代頃に工事の手が入っていると、新たなプランによる改築Ⅱ城郭の新造までは考えにくい、つまり、基本的には古代末期の姿を伝えていると考える。

先に述べたように、戦国時代、平川河谷は南北諸勢力の軍勢の通り道であった。とくに元龜二年（一五七一）五月、津軽大浦城主大浦為信が石川城を攻略し、南部石川高信を滅ぼして以降は、激しい戦乱の時代となり、元龜二―三年には、南部勢の津軽侵攻・石川城奪回の企てと、平川河谷をめぐる南部・大浦両勢力の争奪戦が展開した。つづく天正六年（一五七八）、大浦為信が波岡御所北畠頭村（具愛）を滅ぼすと、同年から翌年にかけて頭村の舅であった檜山・脇本城主下国安東愛季が大軍を率いて侵入、平川河谷から津軽平野南部までを占領して、激戦を繰り広げることになった。⁽²⁸⁾さらに天正十一年、安東愛季による比内扇田（長岡）城主浅利勝頼謀殺、比内領併合の後、⁽²⁹⁾浅利遺臣と大浦為信勢による比内侵攻が連年繰り返されたことが、記録・文書から判明する。⁽³⁰⁾

そうした中で、次に示す、大浦為信による石川城攻略後の元龜三年（一五七二）のものと思われる南慶儀書状写（「南部家文書」、南慶儀は信直派で浅水城主）は、石川城の失陥による津軽支配の崩壊（津軽郡

相破れ候」とある）や、大浦対策に追われる三戸南部氏家中の状況、大光寺勢の動きに対する期待、平川河谷（大鰐）をめぐる大浦・南部両勢力の争奪戦の様相などを生々しく伝える、興味深いものである。

従久慈御帰宅被成候由承候者、自是可申入与存候処ニ、預御音問候、祝着之至二候、如仰津軽郡相破候、能時分二候之間、此境当郡談合申度与被存候、分而七戸路次と申、肝要ニ被存候条、無底意被仰合候様ニ御意見可為專一候、然者、先日重而可致到来之由、従大光寺被申候つれ共、今迄無音二候、無御心元存候、随而自大浦、大わに被攻候而、下館打破候へ共、日暮候而、内城相続候由聞得候、大浦・大光寺先々相当之様ニ相見得候、諸事自三戸、聽而音信可被申候、恐々謹言、

三月廿四日

八戸殿

御返事

慶儀 判

猶々申候、七戸口可被仰繼候由承候、肝要ニ被存候、横内相続られ候内ニ時宜被相調候ハん事肝要ニ候、

ちなみに、ここで語られている「大わに（大鰐）の城」とは、現在の⁽³¹⁾大鰐町蔵館ないし元長峰館であろうが、「下館」は大浦勢に破られたが、日没に助けられて「内城」はもちこたえているという風聞だ⁽³²⁾という文章は、まことにリアルで、「下館」「内城」というこの時期の北奥羽の城館の構造だけでなく、南部氏による平川河谷（北の「七戸口」と並び南から三戸への連絡ルート、「鹿角口」の掌握や、大鰐・横内（青森市横内）など、拠点城館網の整備の状況を浮び上らせてくれる。

この文書と対応するように、平川河谷には「南部系の技術」（大浦氏

も南部氏の一族)とでも評価できそうな特徴をもつ城館が点々と存在する。それは台地を深い葉研状の空堀で掘切り、いくつかの郭を設けたもので、空堀に面する郭には堀の開口部から侵入せんとする敵を側面攻撃するための平場Ⅱ腰郭や張り出し施設を構えるなど、進んだ工夫も凝らされている。幅広の空堀を設け、その内部(多くは中心側)に深い葉研状の堀を穿って、防衛力を強化することもあった。当然、緩やかな斜面には、切岸と平場によって腰郭を設け、防衛ラインを強化するのが普通だったし、「喰違い虎口」「枳形虎口」など、虎口の発達も顕著であった。

こうした構造は、八戸の根城や七戸城、南部氏の津軽支配の拠点石川城、平川河谷では、砂沢平遺跡の北西二キロにある元長峰館や大鱈町の蔵館・森山城、碓ヶ関村の永野館(近世の天和の絵図には「古館」と記される、「津軽一統志」に「秋田南部堺碓ヶ関古館」とあるのはこれか)など、青森県内の多くの戦国期城郭に共通する。

だが、これまで述べてきたことから明らかなように、砂沢平遺跡の「城郭遺構」にはそうした戦国期城郭の特徴が全く見られない。同じ古代の高地性集落遺跡でも、先に述べたように碓ヶ関村古館遺跡では、他の戦国時代の城館遺跡と共通の特徴をもった空堀遺構が現存し、中世の改修・再利用をうかがわせてくれるが、砂沢平遺跡の堀や郭・虎口の構造は、それらとはあまりにも異質なのである。ところが、これと全く反対に、丘陵の中腹に延々と横堀をめぐる砂沢平型の「城館遺跡」は、当地域では現在まで、碓ヶ関村古館遺跡(Ⅱ郭の中腹に横堀がめぐると、同じく古代末期の防御性集落と三浦圭介氏の指摘する弘前市石川長者森遺跡³⁶以外、確認されていない。

それだけではない。実は、砂沢平遺跡にみられるような横堀をめぐるタイプの「城郭遺構」は、青森県では、市浦村の墳館や唐川城、小泊村の柴崎城、青森市後潟の尻八館など、蝦夷管領安藤氏の勢力圏であった外ヶ浜・西浜の中世城館遺跡によく見られるものであった。これらの城郭の営まれた時期が戦国時代に下らず、十五世紀前半までに限定されること、古代防御性集落遺跡と重複している場合が多いことも、また千田嘉博氏によって指摘されている³⁷。そもそも、丘陵の中腹にめぐらせた横堀は、岩手県平泉町の高館山遺跡(柳之御所遺跡に隣接)や、秋田県横手市の大鳥井山遺跡(清原氏の大鳥山柵跡と推定)、岩手県北部の「高地性集落」遺跡Ⅱ西根町暮坪遺跡・盛岡市千ヶ窪遺跡⁴¹などでも確認されているごとく、古代末期の本州北部地方の城館・防御性集落に特徴的な堀の構築方法であった。砂沢平遺跡の堀の遺構を戦国時代の城郭建設によるものとするのが困難なのは、この点からも明らかである(これは「西側遺構」についても同じ)。

それならば、砂沢平遺跡の城郭遺構が、鎌倉～室町時代に安藤氏系在地勢力によって建設された可能性はないか。しかし、南部家文書・新渡戸文書が語るごとく、平川河谷は鎌倉時代には北条得宗領、曾我氏が地頭代であって、この地が安藤氏の所領となったり、一定の期間その勢力下に置かれたことを示すような文書・記録は存在しない⁴²。もちろん、南北朝動乱の時代、この地域は南から津軽、北から鹿角・比内への侵入の経路となり、大鱈付近はたびたび軍勢の集結地となった。元弘四年(一一三三～四)二月の曾我光高申状案(「南部家文書」)には、「朝敵余党人など、小鹿島ならびに秋田城⁴³、楯を所々に築き、津軽中に乱入す

べきの由、その聞え有るの間、国中の給主御家人、大阿全郷一口に集会せしめ、これを防戦せんがために凶徒を相待つ」という、興味深い事実が記されている。「大阿全」とは大鰐を指し、それが「一口」と呼ばれていたこともわかる。それゆえ、安藤氏などの在地諸勢力がこの地に進駐し、一時的な陣所・砦として砂沢平の古代防衛性集落の跡を改修・再利用したことは十分ありうるだろうが（とくに「西側遺構（およびその北側の丘）」の城郭施設は下を通る奥大道路ルートを押さえる絶好の場所）にあり、この時期つくられた可能性が高いと考える）、現在見るような本格的な城郭遺構を、内乱の中で初めて建設したとは、やはり考えがたいのである。

ただ、砂沢平遺跡の性格を考えるためのもう一つの大きな問題、すなわち、この遺跡が現在見るような主郭・副郭の分離した「複郭」構造を集落の営まれた平安時代後期から備えていたかどうかについては、確認する方法がなかった。しかし、近隣の碓ヶ関村古館遺跡の場合、堀の配置を子細に観察すれば、まずⅠ郭がつくられ、次に（あるいは同時に）Ⅱ郭を台地から分離する空壕と中腹をめぐる横堀が掘られるというように、当時から複数の郭をもっていたと推測される空堀の構造・配置を呈している⁽⁴³⁾。最近発掘調査が行われた岩手県暮坪遺跡でも、山上の平坦部に住居を配置し、中心地区に空堀をめぐらして全体を二分するという、やはり複郭式の構造であった⁽⁴⁴⁾。そもそも、三浦氏が「上北型」と名づけた初期の防衛性集落が、集落全体を囲郭する以前に、族長層の居住空間を小規模な堀で囲むことから始まっていた⁽⁴⁵⁾。あくまで状況証拠ではあるが、後世の改造がそれほど大きくなかったと思われることと合わせ、

砂沢平遺跡の古代集落が初めから複郭式の構造をもっていたと考えるのが、最も自然な想定ではあるまいか。そして、そのことは、北の古代防衛性集落と弥生時代の環濠集落・高地性集落との間には本質的な相違があること、すなわち、すでに登場していた族長層が、まず自らの居住空間を囲郭し、その後、一般集落成員の居住地にまで防衛施設を拡大するという、弥生の防衛性集落とは逆の発展過程をへて成立したことを、意味するものである。

三、「山城型の防衛性集落」の形成・発展と

十～十二世紀の北方世界

以上の事実をもとに砂沢平遺跡や古館遺跡の特徴をあらわすとすれば、「山城型の防衛性集落」と表現するのが、やはり最も適切であろう。それは、居住集団の性格と立地条件からいえば「高地性集落」であり、防衛施設の発達や主郭・副郭の分離（つまり族長とそれ以外の集団との分離）に着目すれば、のちの北日本地域の（とくに安藤氏系の）中世城館につながってゆく要素をそなえたものであった。

もちろん、砂沢平の古代集落が最初から現在みるような本格的な防衛施設を備えていたわけではなかったようである。図6の遺構配置図をみれば明瞭なように、Ⅱ郭の縁辺部に設けられた柵列は、七つの堅穴住居を切って造られており、堅穴住居の重複関係を考慮すれば、少なくとも十二の住居跡が柵列以前のものである。また、Ⅱ郭北側・東側の切岸の構築によっても四棟が一部を破壊されている。集落が存在したとみられ

る十世紀半ば～十一世紀末の間の後半、それも遅い時期に、斜面が切岸状に加工され、柵列が設けられるなど、防御施設が整えられていったことは確実である。

もともと、集落の営まれた早い時代から、すでに一部の防御施設の構築は始まっていたらしい。それを示すのが、Ⅱ郭上部平坦面の東部を南北方向に掘って造られた箱薬研堀(図6の第1号堀)の存在で、その幅は一・四～二・〇m、丘陵南側では四mほどの長さで縦堀状に斜面を下っている。しかも、この堀によってⅡ郭の東側入口部分と中心部分は分離され、Ⅱ郭の入口に小郭状の区画が形成されていた(一種の「馬出し郭」的な役割を果たす)。実は、この堀は23号住居跡を切って、その後には造られている。集落の営まれていた時代、それも遅くない時期に、この堀が存在していた証拠である。

おそらく砂沢平の古代集落は、当初、丘陵の上面を大々的に削平・整形し、さらに空堀を穿ってⅠ・Ⅱ郭を分離して、Ⅰ郭に族長の住居、Ⅱ郭に集落一般成員の住居群を営むといった、複郭式の「高地性集落」として始まったに違いない。その時期は、三浦圭介氏の土器編年に従えば十世紀半ば過ぎであろうか。

十世紀半ばとは、大陸では唐帝国の滅亡(九〇七年)、契丹国建国(九一六年)と渤海の滅亡(九二六年)、契丹の燕雲十六州領有(九三六年)と華北占領(九四六～七年、このとき国号を大遼国と号す)など、東アジアの古代帝国が次々と崩壊し、北方騎馬民族「契丹」が活発な活動を展開し始めた時期である。こうした大陸の激動は日本列島にも無関係でなく、同じ時期、鉄利・黒水靺鞨など、かつて渤海の支配下にあつ

たアムール川流域の靺鞨族諸部が勢力を盛り返して、新たに「女真」族として登場、日本海を隔てた北海道との活発な交流が始まっていた(それはやがてアイヌ民族の形成につながってゆく)。天慶二年(九三九)十二月の平将門による坂東占領・新皇即位(承平天慶の乱)に際し、「大契丹王」による「討取渤海国」の歴史が、早速、彼の軍事政権樹立を正当化する論理として使われたこともまた、日本列島における政治情勢と大陸の激動との密接な関わりを物語っている。そして、この時代、唐・渤海・新羅など大陸の古代帝国と同様、日本国でも律令国家以来の朝貢・饗給にもとづく蝦夷支配体制は放棄され、「交易」にもとづく新たな支配・服属関係が構築されて行った。それは北方の蝦夷(エミシ・エゾ)勢力に新たな興隆と発展の可能性を与えるものであった。

将門挙兵の少し前の天慶二年四月～八月、出羽国北方で元慶の乱以来の大規模な俘囚蜂起が起こった。反乱勃発を知らせる出羽国よりの急使が都に着いたのが四月十七日、再度の馳使到着が五月六日。蜂起の主体は本州北部のエミシ勢力だけでなく、従来彼らと敵対関係にあることの多かった北海道のエミシ(「異類」と記される)も含んでいたらしい。それだけに、この事件は、これまで頻繁に繰り返されてきた北奥羽のエミシ反乱と異なり、北方世界における全く新たな動きを示すものであった。同じ頃、従来津軽海峡以北にとどまっていた擦文土器の分布が、海峡を越えて本州北部に浸透を始める。しかもそれは交易品ではなく、本州北部の現地の人々によって製作されたものだという。近年の考古学研究によって解明された右の事実のもつ意味はまことに大きい。

事実、俘囚蜂起に対する政府の驚きは非常に大きなものがあった。再

度の急使到着の九日後の五月十五日、⁽⁵⁴⁾「東国西国群賊悖乱事」祈禱のため、「諸社并東海東山両道明神（名神）臨時幣帛使」が遣わされ、「延喜元年二月例」（一月菅原道真左遷、二月「東国乱」起る）に習い建礼門において「大祓」が挙行される。翌十六日には「太一式祭」を八省院に修して、兵乱終息の祈禱が行われた。対応はこれにとどまらず、同十六日、臨時除目を行って「東国介」を任命。二五日には東西両京に賑給。さらに六月一日には「十五大寺并諸社」において仁王経御読経を行うなど、矢継ぎ早の対策が進められた。

ちなみに、これらの政府による祈禱は、『本朝世紀』など後の編纂物では「依坂東兵賊事」などと記されているが、武蔵介源経基が上京して将門の謀反を密告したのが三月三日、⁽⁵⁵⁾将門が常陸国府を襲い公然たる反乱に立ち上がったのが十一月二日である。⁽⁵⁶⁾一方、将門問題での祈禱は、二月九日と、⁽⁵⁷⁾経基上京翌日の三月四日、九日に行われたが、その後は先に述べた五月十五日の諸社奉幣使派遣まで、祈禱の記録がない。こうした事件と政府の対応との時間関係をみれば、将門問題ではなく、むしろ出羽俘囚蜂起に対する対応として一連の祈禱が行われたことは明瞭であろう。仮に坂東問題が含まれていたとしても、「将門謀反」と出羽俘囚蜂起が一体で「東国群賊悖乱」と認識されていたと考えねばならぬ。そして、北方における俘囚・エミシの動きの背後に、大陸での契丹（遼）の勢力拡大と、それにもなつて起こっていた北方諸民族の激しい動きのあることを、中央政府が認識していた可能性すらある。『遼史』本紀・太祖天賛四年（九二五）十月庚辰条には「日本国来貢」の記事がある。この興味深い記事も、東北アジアの激動に対する日本国側の関心

という文脈から理解できようし、⁽⁵⁸⁾十世紀以降、本格的に展開する蝦夷支配機関としての鎮守府・秋田城の強化も、東北地方北部におけるエミシ支配の転換・強化というだけでなく、対北海道・大陸・契丹国対策という視点から、改めて評価する必要がある。

そして、そのことは、「日本国」と北緯四〇度以北の「蝦夷の地」との間に、再び厳しい緊張の時代が到来したことを物語るものであった。いうまでもないが、文献資料における蝦夷反乱の記事の消滅は必ずしも事実としての平和の到来を意味しない。例えば、奥六郡の最北端・岩手郡の「蝦夷の地」に接する北部山地には、先に紹介した暮坪遺跡や子飼沢山遺跡など数多くの「高地性集落」遺跡が分布する。しかも、これらの集落遺跡は高い山や丘陵の山頂部にあり、およそ日常生活の匂いが感じられないばかりか、北緯四〇度以北では普遍的であった北方系の土器Ⅱ「把手付土器」や擦文土器の出土もみられない。⁽⁵⁹⁾同じ「北の古代防御性集落」遺跡であっても、北緯四〇度ラインⅡ「日本国」と「蝦夷の地」の境界線を挟んでこれだけ性格が異なっているのである。もとより、奥六郡内の防御性集落遺跡の性格については未解明の部分が多く、その究明は今後の課題だが、単にエミシ・エゾの集落として処理せず、北の「蝦夷の地」に対して「日本国」側の間人集団が設置した施設の可能性も含めて検討してゆくことが必要と思う。拙稿でも述べたが「北の古代防御性集落」出現の理由は、エゾ社会内部での「活力」と「交易」による富の蓄積、それに伴う内部抗争の展開だけでなく、日本国側の新たな北方政策・蝦夷支配政策（それがエゾ社会の「活力」をもたらす一因でもあった）による、「日本国」「エゾ」両勢力の対立状況という、二つ

の關係の中で評価するのが適切である。

しかしながら、「北の古代防衛性集落」の形成と発展の歴史は、それだけにとどまらない。砂沢平遺跡の防衛施設の変遷は、この集落が存続した百数十年の期間の後半期に入って、防衛施設の一層の強化を必要とする政治・社会状況が生まれたことを、教えてくれる。そして、後期から末期に至って、斜面を切岸状に加工し、柵列を設けるといった、現在の形に近い（「近い」というのは中世の改造の可能性があるからである）


「山城型の防衛性集落」に発展した。このような推測が可能になる。従来一般に「北の古代防衛性集落」が存在したのは、十世紀半ば～十一世紀後半の時期」とされてきた。しかし砂沢平遺跡の変遷は、その一世紀余りのうちの後期から末期に至り、防衛施設を一層強化することが求められる政治・社会状況が到来したという、興味深い事実を示している。

その「後期から末期」とは、いうまでもなく、前九年合戦（一〇五一～六二年）以後の時代であった。しかも延久二年（一〇七〇）には、前年五月「東夷征討」を石清水八幡宮に祈願した後三条天皇の命で、清原真衡の主導による「衣曾別島（夷島）」、「津軽」、「閉伊七村」の「三方」のエゾ勢力に対する大規模な征討が実施⁶⁶。その成功の結果、「日本国」の領域は一気に津軽海峡まで到達して、北奥羽の地に建郡が行われるに至った⁶⁷。南の「日本国」による本州北部「蝦夷の地」の併合である。

だが、この軍事的成功は、すぐには北方の安定をもたらさなかったらしい。『尊卑文脈』は、陸奥守・鎮守府將軍藤原基頼について、「嗜弓馬好鷹犬、達武略、討出羽常陸并北国凶賊、蒙將軍宣旨」という注目すべき記事を記す。藤原基頼の陸奥守・鎮守府將軍在任は康和五～永久元年⁶⁸

（一一〇三～一三、ただし鎮守府將軍は一一〇四年五月から）、奥州藤原氏初代清衡の後半の時期である。それゆえ、北奥羽の政治的安定達成は十一世紀後半の時期には完成されず、十二世紀の一〇年代まで下る可能性⁶⁹がある。

これと対応するように、青森県地域では、近年の発掘調査の進展によって、奥州藤原氏時代のカワラケや輸入・国産の陶磁器が次々と発見されている。しかも、その多くは十二世紀の後半、三代秀衡時代のものであり、遡っても十二世紀の第2四半紀（一一二五～一五〇年）、二代基衡の時代までしか確認されないと⁷⁰いう。本州北部の「蝦夷の地」の文化的「併合」は、早くても十二世紀の第2四半紀ということになる。ちなみに高屋敷館遺跡では、堀跡から出土した橋脚の木材を年輪年代法によって測定したところ、一本が一〇一〇年プラスα、もう一本が一〇一〇六年頃と、まさしく十二世紀の一〇年代頃まで集落が存続していたことを示すデータが検出された⁷¹。

砂沢平遺跡でも、集落の終末を考える上で無視できない事実があった。それは、6・11・24・25号住居跡（）のように、竪穴住居跡の中にカマドをもたず倉庫跡と思われるものが含まれていることだ。とくに6・11号住居跡は、中世後期の城館遺跡などで広く検出される方形の張り出し部をもった独特の形のものであった。高橋與右衛門氏の研究によれば、こうした形態のものは、東北北部では十二世紀以降に出現、十四世紀以後類例が増加するという。この竪穴倉庫が南北朝～室町時代の再利用に際してのものか、あるいは集落の存続が十二世紀代、ないしそれ以降にまで及んでいたのか。単に砂沢平の古代集落の終末の

問題だけでなく、「北の古代防御性集落」全体の終焉を考える上で、今後に残された重要な問題である。

(注)

- (1) 青森県埋蔵文化財調査報告書第二〇六集『高屋敷館遺跡発掘調査概報』（青森県教育委員会、一九九七年）、三浦圭介「高屋敷館遺跡（浪岡町）の調査」（『日本歴史』五七八号、一九九六年七月）「防御性集落 高屋敷館遺跡」（別冊歴史読本『城郭研究最前線』、新人物往来社、一九九六年）。
- (2) 『考古学ジャーナル』三八七号（ニュー・サイエンス社、一九九五年四月）。
- (3) 大石直正「中世の黎明」（『中世奥羽の世界』、東京大学出版会、一九七八年）など。
- (4) 久保泰・森広樹「渡島半島南部の擦文時代の防禦集落」（前掲『考古学ジャーナル』三八七号）。
- (5) 平川善祥「北方地域からみたアイヌ文化の成立―近年のサハリンでの発掘調査から―」（北海道立北方民族博物館『博物館フォーラム アイヌ文化の成立を考える』、一九九六年）。
- (6) 江上波夫・関野雄・桜井清彦「館址―東北地方における集落址の研究―」（東京大学出版会、一九五八年）に代表される。
- (7) 本堂寿一「東北地方におけるチャシ論史考、付 タテとチャシの調査例二題」（『北奥古代文化』九号、一九七七年。北海道チャシ学会編『アイヌのチャシとその世界』、北海道出版企画センター、一九

九四年、に再録）。

- (8) 村田修三「城郭概念再構成の試み―チャシ・グスクを素材にして―」（『中世城郭研究論集』、新人物往来社、一九九〇年。『アイヌのチャシとその世界』に再録）は、この問題に注目している。
- (9) 「本州の擦文文化」（『考古学ジャーナル』三四一号、一九九一年十二月）、「古代東北地方北部の生業にみる地域差」（『北日本の考古学』、吉川弘文館、一九九四年）、『新編弘前市史』資料編Ⅰ／考古編Ⅲ第三章古代（一九九五年）、「青森県における古代末期の防禦性集落」（前掲『考古学ジャーナル』三八七号）、「北奥羽・北海道地域における古代防御性集落の発生と展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告』六四集、一九九五年）。
- (10) 「北日本の平安時代環濠集落・高地性集落」（前掲『考古学ジャーナル』三八七号）、「子飼沢山遺跡発掘調査の概要」（『考古学ジャーナル』三八八号、一九九五年五月）。
- (11) 「区画施設を伴う古代集落遺跡について」（『よねしろ考古』五号、一九九〇年）、「秋田県における平安時代の防禦集落」（前掲『考古学ジャーナル』三八七号）。
- (12) 「米代川流域の中世社会」（『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』九号、一九九四年）。
- (13) 「村の城」については、横山勝栄「新潟北部の小型城郭について」（新潟県東蒲原郡三川村立三川中学校『研究紀要』、一九八八年）、井上哲郎「村の城について」（『中世城郭研究』二号、一九八八年）、藤木久志「村の隠物・預物」（『ことばの文化史』中世Ⅰ、平凡社、

一九八八年)『雑兵たちの戦場―中世の傭兵と奴隷狩り―』(朝日新聞社、一九九五年)、市村高男「戦国期城郭の形態と役割をめぐって」(『争点日本の歴史』4中世編、新人物往来社、一九九一年)、などの研究がある。

(14) 口頭発表「高屋敷館遺跡の歴史的意義」(①青森県考古学会平成八年度発表会、一九九六年四月七日、②東北中世考古学会第2回研究大会、一九九六年八月二五日、③平成八年度東北史学会大会・考古学部会、一九九六年十月六日)。

(15) 拙稿「蝦夷社会の交流と『エゾ』世界への変容」(『古代王権と交流』第一巻『古代蝦夷の世界と交流』、名著出版、一九九六年)。

(16) 三浦氏前掲「本州の擦文文化」(『青森県における古代末期の防禦性集落』北奥羽・北海道地域における古代防衛性集落の発生と展開)。

(17) 遠藤巖「米代川流域の中世社会」(前掲)、入間田宣夫「北奥諸郡の建置と延久二年合戦」(『北奥古代文化』二四号、一九九五年)。

(18) 『大鰐町砂沢平遺跡発掘調査報告書』(青森県教育委員会、一九八〇年)、『碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』(青森県教育委員会、一九八〇年)。

(19) 『大鰐町砂沢平遺跡発掘調査報告書』によれば、砂沢平遺跡は一九六七年に青森県教育委員会が実施した東北縦貫自動車道予定地内大鰐地区埋蔵文化財分布試掘調査の際に「発見」されたという。

(20) 『天和の絵図』(天和四年二月二九日碓ヶ関村絵図、同年一月二二日碓ヶ関御山絵図)に、いずれも「古館」と記されている。

(21) 高橋與右衛門「発掘された中世の建物跡」(中世の里シンポジウム

ム実行委員会編『北の中世』、日本エディタースクール出版部、一九九二年)の指摘による。

(22) 三浦氏前掲「本州の擦文文化」(『古代東北地方北部の生業にみる地域差』『新編弘前市史』資料編1/考古編/第三章古代)。

(23) 注(15)拙稿、および三浦圭介氏の研究を参照されたい。

(24) 『碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』による。

(25) 『愚耳舊聴記』南部大膳御誅罰之事、『永禄日記』元亀二年条、『封内事実秘苑』元亀二年条、『津軽一統志』巻第二・大仏ヶ鼻夜討城主高信自害之事、など。なお南部氏側の記録にはこの記事がなく、逆に『聞老遺事』『石井三庵政満覚書』などには、元亀三年の南部高信による津軽三郡平定が記されるが、これは時間的に無理があり、現在の研究では津軽側の史料の方が基本的に事実を伝えていると考えられている。

(26) 『永禄日記』元亀二年条、『封内事実秘苑』元亀二年条、『津軽一統志』巻第三・南部信直津軽進発付高畑城軍之事。

(27) 『愚耳舊聴記』波岡責の事、『封内事実秘苑』天正六年条、『津軽一統志』巻第四・浪岡落城御奇計付御所殺害之事。

(28) 『永禄日記』天正七年条、『封内事実秘苑』天正七年条、『津軽一統志』巻第四・比山勢籠乳井茶臼館説。および、年未詳正月十七日付蠣崎阿陀季広書状写・同正月十七日付蠣崎慶広書状写・同十月四日付蠣崎阿陀季広書状写(いずれも秋田藩採集文書『奥村立甫家蔵文書』)。

(29) 『新羅之記録』下巻、『福山秘府』年歴部卷之三・天正十一年条、

『源姓浅利氏系図并由緒書』、『下国伊駒安陪姓之家譜』、および、
年未詳五月十九日付安東愛季書状（秋田家文書）。

- (30) 『源姓浅利氏系図并由緒書』、『坊沢村長崎氏旧記』。なお、元龜二年以降の北奥羽の政治過程については、遠藤巖「北奥羽の戦乱―南部氏と秋田氏と津軽氏と―」（『戦乱の日本史』8『戦国の群雄―西国・奥羽』）、第一法規、一九八八年）、「戦国大名下国愛季覚書」（羽下徳彦編『北日本中世史の研究』、吉川弘文館、一九九〇年）、大島正隆「北奥大名領成立過程の一断面―比内浅利氏を中心とする考察―」（『喜田博士追悼記念国史学論集』、一九四二年、『東北中世史の旅立ち』、そして、一九八七年、に再録）、で詳しく論じられている。

- (31) 蔵館・元長峰館についての詳しい調査報告は出されていないが、沼館愛三『津軽諸城の研究』（みちのく双書第三四集、一九七八年）、青森県教育委員会『青森県の中世城館』（一九八三年）、『大鰐町史』上巻（一九九一年）に、簡単な紹介がある。

- (32) 『史跡根城跡発掘調査報告書』I～XI（八戸市教育委員会、一九七八～八五年）、『根城―本丸の発掘調査』（八戸市教育委員会、一九九三年）。

- (33) 『史跡七戸城跡保存管理計画策定報告書』（七戸町教育委員会、一九八五年）、『史跡七戸城跡北館I～IV』（七戸町教育委員会、一九九二～九五年）。

- (34) 『新編弘前市史』資料編1（古代・中世編）第三章「弘前市域の中世城館」第二節「石川城跡」（一九九五年）。

- (35) 元長峰館・森山城・永野館については、一九九五～九六年、『新編弘前市史』『青森県史』編纂・執筆のための調査を行い、その際、城郭の構造について七戸町教育委員会小山彦逸氏のご教示を得た。

- (36) 三浦氏前掲「青森県における古代末期の防禦性集落」、および「石川長者森遺跡発掘調査報告書」（学校法人東奥義塾、一九八七年）。

- (37) 「北の山城」（『国立歴史民俗博物館研究報告』六四集、一九九五年）。

- (38) 前川佳代「高館残照」（『古代文化』四五卷九号、一九九三年）、入間田宣夫「平泉柳之御所跡研究の現在」（『国立歴史民俗博物館研究報告』六三集、一九九五年）。

- (39) 八木光則「安倍・清原氏の城柵遺跡」（『岩手考古学』一号、一九九一年）、『大島井山―横手市大島井山遺跡発掘調査概報』I～V（横手市教育委員会、一九七八～八二年）。

- (40) 福島大学行政社会学部考古学研究室「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要」（『岩手考古学』八号、一九九六年）。

- (41) 室野秀文・井上雅孝・池田明朗・東本茂樹「岩手郡南部の古代末期防禦性集落―滝沢村大釜千ヶ窪I・II遺跡―」（『岩手考古学』七号、一九九五年）。

- (42) 『新編弘前市史』資料編1（古代・中世編）第一章「蝦夷・津軽関係編年史料」（一九九五年）による。

- (43) 古館遺跡の郭を分ける空堀は、①I郭をII郭と台地から切り離している幅広の堀（I郭寄りにさらに薬研堀が掘られている）、②堀①

の中央から直角にT字形をなすように掘られⅡ郭を台地から切り離している幅広の堀（Ⅱ郭寄りが一段低くなっており、堀①の場合と同様、内部に薬研堀が掘られていたと推測される）の2本からなる。もしⅠ・Ⅱ郭が当初一体の構造だったならば、堀②は現在のような形ではなく、Ⅰ・Ⅱ郭全体を台地から切り離すように直線的に掘られたはずである。これに、Ⅱ郭の中腹を横堀がめぐりⅡ郭部分が古代集落の時代から一つの区画として存在したと思われることを、合わせ考えれば、古館の古代集落が、本来、複数の郭をもつ構造だったと理解するのが、最も自然である。

(44) 注(40)に同じ。

(45) 三浦氏前掲「青森県における古代末期の防禦性集落」「北奥羽・北海道地域における古代防禦性集落の発生と展開」。

(46) 弥生時代の防禦性集落（環濠集落・高地性集落）については、佐原真『大系日本の歴史1、日本人の誕生』（小学館、一九八七年）「戦争はいつはじまったか」（佐原真・田中琢『考古学の散歩道』、岩波書店、一九九三年）。

(47) 李成市「渤海史をめぐる民族と国家―国民国家の境界をこえて―」（『歴史学研究』六二二六号、一九九一年十一月）、小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」（前掲「古代王権と交流」第一巻『古代蝦夷の世界と交流』）。

(48) 『将門記』。

(49) 鈴木靖民「古代蝦夷の世界と交流」（前掲「古代王権と交流」第一巻『古代蝦夷の世界と交流』）。

(50) 『貞信公記抄』天慶二年四月十七日条、『日本紀略』同日条。

(51) 『貞信公記抄』天慶二年五月六日条、『日本紀略』『本朝世紀』同日条。

(52) 『貞信公記抄』天慶二年五月六日条。

(53) 三浦圭介氏前掲「本州の擦文文化」「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『新編弘前市史』資料編1／考古編／第三章古代。

(54) 『貞信公記抄』天慶二年五月十五日条、『日本紀略』『本朝世紀』同日条。

(55) 『貞信公記抄』天慶二年五月十六日条。

(56) 『貞信公記抄』天慶二年五月十五日条、『本朝世紀』同十六日条。

(57) 『貞信公記抄』天慶二年五月二三日条、『本朝世紀』同日条・二五日条。

(58) 『貞信公記抄』天慶二年六月一日条、『本朝世紀』同五月十九日条。

(59) 『貞信公記抄』天慶二年三月三日条。

(60) 『扶桑略記』天慶二年十一月二日条、『将門記』。

(61) 『大神宮諸雜事記』一、朱雀天皇。

(62) 『貞信公記抄』天慶二年三月四日・九日条、『日本紀略』同四日条。

(63) この記事の解釈については遠藤巖氏のご教示を得た。なお『遼史』が伝える「日本国来貢」の記事については、島田正郎「契丹国―遊牧の民キタイの王朝―」（東方書店、一九九三年）でも論及がなされている。

(64) 工藤雅樹「北日本の平安時代環濠集落・高地性集落」「子飼沢山遺跡発掘調査の概要」（前掲）、福島大学行政社会学部考古学研究室

「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要」(前掲)。

(65) 拙稿「蝦夷社会の交流と『エゾ』世界への変容」(前掲)。

(66) 『皇代記』延久元年五月条、延久三年五月五日付官宣旨(『朝野群載』卷十一)、応徳三年正月二三日付前陸奥守源頼俊申文(御堂撰政別記裏文書、『平安遺文』四六五二)。遠藤巖「東アジアの国際情勢の中で」(国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』、新人物往来社、一九九四年)。

(67) 入間田宣夫「北奥諸郡の建置と延久二年合戦」(前掲)。

(68) 『中右記』康和五年十一月一日条、『本朝世紀』同日条、『中右記』長治元年五月二日・三日条、『中右記』天仁元年十二月二九日条、『長秋記』天永二年十二月二日条、『殿暦』永久元年七月二九日条。

(69) 遠藤巖「『北の押え』の系譜」(『アジアの中の日本史』Ⅱ外交と戦争、東京大学出版会、一九九二年)。「藤原清衡―平泉開府と中尊寺建立―」(『歴史読本』五九五号、特集奥州藤原氏四代の興亡、新人物往来社、一九九三年)。

(70) 三浦圭介「考古学的に見た奥州藤原氏と津軽地方との関係」(年報『市史ひろさき』三号、一九九四年)、『新編弘前市史』資料編1(『考古編』第三章古代)(前掲)。

(71) 畠山昇「高屋敷館遺跡について」(一九九六年十月六日、弘前シンポジウム96「日本史のなかの北の『防御性』集落」事例報告)、および『高屋敷館遺跡発掘調査概報』(前掲)による。

(72) 高橋與右衛門「発掘された中世の建物跡」(前掲)。

(さいとう・としお 弘前大学教育学部助教授)